

山崎の... 山崎の... 山崎の...

山崎の... 山崎の... 山崎の...

初代清信は語

(山崎の半回詩人フサッ)

野口半信印



p. 14

Handwritten circled numbers and marks at the top right.

彼者は小さい山崎を御歩し、  
懐想をこぼしたる。

わが執情を時かき時くと継ぎえさせる。

何たる粗野な夢、

謹然たる定めなきはき、  
時の流れは三水と守重するも、

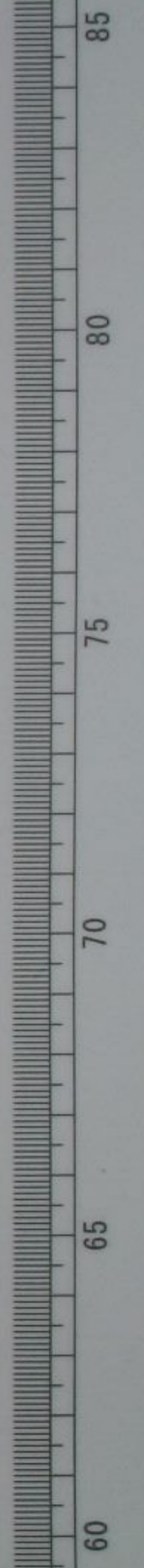
将来あか夢として記憶さかすにまろ人も知  
れあひ。

壽かな巨人の魁形、

大膽な意の衣と幾枚も重ぬ、  
岩盤ふつこ歩む、  
これわが古く夢みたる  
夢だ。

新町柏屋特製

10x20





清信に初代と二代とがある。二代清信は初  
 代の器でつくられたと云はれるが確證がない。  
 緑と紅とを優美に使用した精細な二色招袋を  
 清信はこの二代清信の作と云ふ。初代の大々  
 判置物物は二色也格界の偉麗であるが、その色  
 の丹繪に粗剛な趣を誘はれがちである。一般位  
 者清の雛形と信世に示した趣が初代清信の歴  
 史的価値である。本語に「群が子巨人の雛形」と  
 するが、清信かく物と類型的に描くと「運筆の  
 力と調子の粗剛を」と指示したのらう。清  
 信は怒綿叱咤と暗示する此の悲劇的創獲の群  
 子と云ふは、人に甚大なる象と云ふ、予  
 ち晴風の主義と云はれに描いてある。何たる物  
 即ち夢、漢然たるは、まは「まは」のまは清信  
 とよく物語うとある。彼の作心は優美である、  
 清に粗剛は下るかその妙所に一種の英雄的  
 閃光がある。云々云々、まは「まは」た敵義的  
 な性質のもの下るかこと、まは「まは」は世傳  
 創成時代の  
 のまは「まは」を「まは」しめる。このまは「まは」は時の  
 後者の藝術的価値も清信と同様であらう。相違ない。